

一九九二年度の会計中間報告について

『木簡研究』第一四号の編集状況について

第一四回総会・研究集会の日程・内容等について

編集後記

一雨ごとに秋は深くなって、もう晩秋。奈良公園では、紅葉やナキンハゼが朱色に染まり始めている。大会まで、余すところ三週間。ようやく再校を印刷所に戻せる段階までこぎ着けた。

本号では、全国四三遺跡から出土した木簡について新しい情報を掲載することが出来た。お忙しいなか、原稿を執筆していただいた方々や、発掘を担当された方々、関係各機関に、厚くお礼を申し上げる次第です。

論文は五篇を収めることが出来た。山中章氏と小林昌二氏の論文は、昨年の大会報告をもとに、新たな視点を加えて執筆していただいたものである。両報告が、研究集会で会員諸氏の活発な論議をよんだことは記憶に新しい。山中論文は詳細な図表を加えた四〇頁余の雄篇である。岩本次郎氏、鈴木景二氏、吉村昌之氏から、論文を御寄稿していただいた。岩本論文は長屋王家木簡を、鈴木論文は二条大路出土の木簡削屑を手がかりに、それぞれ長屋王家の経済基盤の解明、平城京下の下級官人の実態や都と各地域との交流を析出さ

れている。吉村論文では、敦煌漢簡について、その出土遺構の状況、研究の現状と課題を論じられている。執筆者各位の御努力の御蔭で、第一三号とほぼ同じ分量の大冊とすることが出来た。改めてお礼を申し上げます。

第一四号については、編集担当委員となった私自身が公務やその他に追われて身動き出来ない状況にあり、また編集体制にも諸般の事情があつて、例年通りの編集日程では、大会に到底間に合わないことが当初から予想された。そのため原稿の締切りを一カ月早めたが、最終的には例年とそれほど変わらない状況に立ち至っている。それでも何とか大会に間に合いそうだ、との感触を得られるようになったのは、森公章氏を始めとする奈文研の方々や、委員・幹事諸氏の懸命な努力の賜物である。

昨年度の総会で、委員会から新規会員の入会を二年間凍結すると提案がなされ、了承された。その経緯や問題点については、八木充委員が本号の巻頭言で意を尽しておられる。木簡研究集会や木簡学会の発足当初から関わってきた者の一人として、私も編集体制の弱体化を痛感しているし、また全国の各遺跡から出土する木簡について、その積文の作成に複数の委員が何らかの形で関与していただけたら、との切なる思いをもつ。会員諸氏の英知を集め、木簡研究を志す若い研究者を輩出させる方策を、何とか残された一年間で考えたいものである。

(和田 萃)